

相談支援と共感的理解 — 傾聴する、を身につける

講師：大瀧敦子 先生 明治学院大学 社会学部 社会福祉学科 教授

プロフィール：

上智大学文学部社会福祉学科卒業後、医療法人社団翠会成増厚生病院医療相談室にて約7年間勤務。その後、上智大学大学院文学研究科社会学専攻後期課程満期退学。1996年明治学院大学社会学部社会福祉学科専任講師として着任し、2007年より明治学院大学社会学部福祉学科教授に就任。



第1回 6/23 (木) 19:00～20:30 共感的理解と傾聴の技法

日本語教師の皆さん方は、在留する外国人の方たちにとって最も身近な相談相手の一人であることも多いでしょう。私たちは相談を受けると、まず、良いアドバイスや情報提供をしなければと思いがちです。しかし、相談を受ける際の基本は、相手の話にじっくり耳を傾けることです。人は他人の話を知っているつもりでも、実は「聞きたいところだけ」選択して聞いていたり、これまでの経験に当てはめ勝手な予測を立てて聞いていたりするものです。これでは相手が本当に困っていることに対応できませんし、相談をした側は空しい気持ちになってしまいます。「聞く」ではなく「聴く」ためには、技法があるのです。今回は、「最小限の関わり」で「聴くこと」を、実際にトライしてみましょう。

第2回 6/30 (木) 19:00～20:30 「聴く」ためには、自分をすることが大事

前回は「聴くこと」の入り口を体験していただきました。この後から一歩踏み込んで積極的に「聴くこと」を学んでいただきますが、今回は少し立ち止まって「自分を知ること」（自己覚知）について学んでいきます。なぜ他人の話「聴く」ために、自分を知る必要があるのか？疑問を持たれるかもしれません。相談の受け手には、なぜ自己覚知が求められるのか、どうすれば自己覚知ができたと言えるのか、その意義を考え、自己覚知の入り口に立っていただきたいと思います。

第3回 7/7 (木) 19:00～20:30 積極的に「聴く」を体験する

第1回目で取り上げた傾聴の基本的技法から一歩進めて、より積極的に「聴く」ための技法について取り上げます。私たちも生身の人間ですから、相談者の話を聴く過程で様々な感情を体験することは前回取り上げました。また、聴いているうちに疑問に思ったり、上手く理解できているのか不安を感じたりするものです。これらは、「相手をより理解したい」という姿勢の表れでもあり、適切に表現することで相手への理解が深まり、話している側も自分の話をよく聞いてくれている、興味を持ってくれていると感ずることが出来ます。こういったやり取りが、二者の間の信頼関係を形成していくことにつながっていきます。

第4回 7/14 (木) 19:00～20:30 ソーシャルワーカーが行う相談援助

この講義では、対人援助を専門とするソーシャルワークの基本的な関わり方を取り上げてきました。ここまでの技法や考え方は、心理学を基礎とするカウンセリングと共通する部分が多くあります。しかし、生活支援を行うソーシャルワークの相談はカウンセリングではありません。人々の生活をより広い視野から理解し、対象者だけでなくその人が共に暮らす家族や地域社会へも働きかけを行っていくのがソーシャルワークです。最終講義では、こういった独自の視点を理解し、相談者から持ち込まれる相談内容について、社会的視座を持つことの重要性について取り上げます。

※2022年度（1期）に続き、2023年度（2期）につきましては、傾聴の技法や自己覚知、ソーシャルワークの社会的視座について、在留外国人の生活問題という点から深めていきたいと思っております。具体的には、マジョリティとして私たちは異文化をどう理解するべきかといった点、また外国人が体験する日本という異文化での生活困難とは、といった二方向から考えていきます。

【キーワード：異文化、多文化、ソーシャルワーク、自己覚知】



募集定員：80名（先着順）

会場：オンライン（ZOOMにて開催、録画視聴あり）

申込期限：2022年6月19日（日）

受講料：9,000円（税込）※全回の受講をお勧めしますが、ご希望の回のみのお申し込みは1回2,500円（税込）となります。

申込：詳細はこちら → <https://osakaymca.ac.jp/jle-center/2202.html>